

環境教育と環境倫理の共通の源をさぐる

谷口文章

はじめに

「環境」という共通のタームで融合された教育として、環境教育と環境倫理の源にもどって両者の統合について考察する。本稿では、教育と倫理に共通して流れる感性的文脈の上に、「環境倫理にもとづいた環境教育」を検討する。

1 環境教育と環境倫理における感性・生命・情操教育

(1) 「環境意識」の源泉—自然における感性の覚醒—

① 「環境意識」を育む自然体験

環境教育においては、その教育の源は情操教育として自然における豊かな体験から出発する。それは同時に倫理の源の教育でもあると考えられる。

この意味で、自然に対する生得の感性と生命に対する尊重の念を深め拡げていく最初の教育として、環境教育の役割は大きいものがある。

したがって、いわゆるカーソン Rachel Carson のセンス・オブ・ワンダー（感動する感覚）によって、豊かな自然に対する素直な驚きと命の輝きの原体験から生じる環境意識が、枯渇しないような情操教育が幼い頃から必要となる。つまり自然における環境教育と環境倫理の教育が、環境と生命についての感性の覚醒のために、子ども時代からほどこされることが大切である。

② 「環境意識」を閉鎖する物質至上主義と高度情報社会

現代の若い世代は、“自然環境”とは疎遠となり自然や生命と接することなく、物質至上の便利な社会で育ち、高度情報社会の時代に生きている。コンピュータや機械のような固い感性、すぐに答えの出る「すべてかゼロか all or nothing」という二進数的思考、そして目に見える結果や効果のみを目指した功利主義的な競争原理などによって、決まりきった誤りのない知識を詰め込まれて教育されている。また他方で、彼ら自身はコンピュータ・ゲームのバーチャルな世界や携

帯電話の自閉的な世界に充足している。したがって、他者（他人のみならず自然や社会）との触れ合いを好まないため、現実の人間関係においてもコミュニケーションが得意ではないことが多い。

彼らは“社会環境”における自他関係においても、“心の環境”における自己関係においても、相互のコミュニケーションが十分でない。そのため自我が確立できず、豊かな人格性も培われない傾向がある。

こうして現代の社会状況において、若い世代や子どもは自然や生命そして現実の生活から遊離した、固定した知識を身につけてしまいがちである。

それゆえ、教育的に考えてみると、「自然、社会、心」についての環境意識を閉鎖する無機質な物質や情報の世界から出て、自然体験によって感性を目覚めさせる情操教育が大切となる。その経験の上に、人格形成と倫理観の獲得、さらに新しい知識の創造がなされることが必要と考えられる。

③ 自然体験から「知識」を「知恵」に

教育哲学者のデューイは、「知識」について次のように主張している。「知識はもはや固定したものではない。それは、溶かされて消化されるものである。知識は、社会自身の流れに合わせて活発に動くものである」¹⁾。

この「社会」という言葉を環境教育の基盤である「自然」に拡張して置きかえてみるならば、自然における体験の重要性に気づく。知識は自然の中で固定したものではなく溶かされて消化されるものであり、「自然」自身のすべての動きに合わせて活発に動くものである、ということになる。つまり、知識は溶かされて消化され「身」と同化するべきものであり、自己生成し変化する自然の動きと一体化してはじめて知識が身に植えつけられる。いいかえるなら、知識は自然の動きに同化して身に刻み知恵になるのである。

こうして私たちは、自然体験から“本質的な意味”での「知識 knowledge」を学ぶことができる。このような知識はしたがって、誤りのない動かざるもの、固定したもの、記憶すべきものではなく、自然の動き

の流れに応じた知識や試行錯誤を通じて身に刻みつけられた「知恵 wisdom」であることが理解できる。

さらに、そのような“自然生態系”の上に重ね書きをするように、“社会生態系”や“心の生態系”においても、個々の体験を身に刻み知恵にし、さらにそれを幅広く奥行きのある「情操 sentiment」として安定させることが重要なのである。

(2) 環境教育と環境倫理の源泉

—豊かな環境と多様な生命—

①環境教育の源泉

生命や子どもの成長は、まず感性や感情の発達・分化から出発して、その後、感性の発達の上に知性や論理的思考が発達する。その意味で、感性の目覚めの芽を幼児期から培うこと、つまり情操教育が教育の源となることはいうまでもない。

そのような感性がとらえた環境意識について、カーソンの「センス・オブ・ワンダー sense of wonder」を具体的な事例としてとりあげよう。

「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になる前に澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの真実の本能 true instinct をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。

もしも私が、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない『センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感覚』を授けてほしいとたのむでしょう」²⁾。

したがって、センス・オブ・ワンダーによって、今まで眠っていた感性が自然の中で覚醒し、森や自然の世界での経験が「生涯消えることのない」原体験となることがわかる。それは、あるがままの色彩豊かな世界を純粋な眼で見る感性の洞察力であり、美しいものや畏敬すべきものへの本能的な直感力である。学校の教育を受ける前に、自然の全体を感じ取る感性の潜在能力をすでに子どもはもっている、と考えられよう。

さらに、親、教師、指導者の役割として、次の言葉にも注意を払いたい。

「もしも子どもが妖精の力に頼らないで、生まれつきそなわっている子どものセンス・オブ・ワンダーをいつも新鮮にもち続けるためには、私たちが住んでいる世界の喜び、感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が少な

くとも一人そばにいる必要があります」³⁾。

ここでは、テキストやマニュアルに頼る教育者や指導者という大人の役割ではなく、子どもと共に自然の神秘さや不思議さに共感できるような親や教師の教育的役割の重要性が描かれている。自然環境において教えられる側と教える側の共感的な一体化の場面こそが、“環境教育の源泉”であると考えられる。

②環境倫理の源泉

野性生物の調査を永年行なってきたレオポルド Aldo Leopold は、日常の仕事として野性の生命とただ触れることではなく、永久に記憶に残る野性の生命と直接触れ合った若い頃の体験について述べている。

「半世紀にわたる野性生物についての仕事上の経験は消えてなくなったり、変化したり変わったりするのであるが、若い頃に野性の命と接触しそれを追求していたときの最初の印象は、その生命の形や色や雰囲気を生き生きとした鋭さで保っている」⁴⁾。

このような生命との触れ合いの原体験によって培われた感性は、その後の生命についての知恵を形成し続け、環境についての深い洞察の尺度となる。

「土地倫理 land ethic」を提唱したレオポルドは、さらにその意味を個人の経験から生態系についての経験へと拡げて、次のように述べている。

「水の調べは誰の耳にも聞こえる。……この調べをほんの数小節聞けるようになるにも、まずここで長期間暮らし、丘陵や川のおしゃべりを理解できるようになることが必要だ。そのうえで、静かな夜半、キャンプの火が細くなり、すばる星が巖頭の上空高く上る頃、じっと腰を降ろしてオオカミの咆哮に耳を傾け、これまで見てきたこと、理解を心がけてきたことを一つひとつ真剣に心に思い描いてみる。すると、この音楽が聞こえてくるだろう。幾千もの丘陵に刻まれた楽譜、草木や動物の生ける者と死せる者が奏でる調べ、秒という時間と世紀という時間とを結ぶ音律——以上が渾然一体となった大ハーモニーが」⁵⁾。

誰もがもっている「美的情感 aesthetic affection」は、ここでは、視野を個人の感性であるセンス・オブ・ワンダーから生態系全体を支えている土地倫理の視野に拡がり、普遍的で持続的なものとしてより洗練されたものとなっている。この美的情感は、自然の調和、つまり自然のリズムと生命のリズムとの調和を直覚し共感する。宇宙のリズムと生命のリズムの同調を感じとる。それは、「幾千もの丘陵」という空間をこえ、生ける者と死せる者、秒と世紀の時間を「渾然一体」に

結びつける情感なのである。このように静かに深く感動するものと感動されるものとの間には、無限の空間と無限の時間の交差した瞬間において“生命と環境”の存在の本質が顕現して「大ハーモニー」が生じているといえよう。このような原体験は“環境を見る永遠の眼”として道徳的な価値判断の基準となる。

環境破壊によってこの美的情感に反することは、「道徳的情感 moral affection」として誰もが認めることはできないであろう。人間には、生態系の一員として人間を超越した大自然と歴史的生命の連鎖を尊重し、畏怖し、見守ることが本能的に備わっているといえよう。いいかえるなら、自然を必要以上に破壊し汚染することは道徳的情感に逆らうことであるのを、人間は本能的に知っている。このような美的情感に根ざした道徳的情感こそが、感性の文脈の中で持続し規範的情操 sentiment となる。それが“環境倫理の源泉”と考えられる。

③「生命の歴史と生物多様性」をめぐる環境教育と環境倫理

土地倫理の美的・道徳的情感は規範性を帯びつつ、さらに美的・道徳的情操 aesthetic and moral sentiment の規範となり普遍化されていく。たとえば、「生命の歴史と生物の多様性」について述べている社会生物学者のウィルソン Edward O. Willson も、ブラジルの森林における次のような刻印されるような原体験を述べている。

「稲妻がストロボのフラッシュさながらに雨林の壁を照らした一瞬、私の目に映ったのは層をなす構造であった。木々の梢は地上30mの林冠をなし、その下に中層木が乱雑に広がり、最下部には低木類やまだ小さな木が散在している。ほんの数分間、森林はこの舞台装置の中に照らし出された。その心象はシュールな様相をおび、一万年前に引き戻された人間の束縛のない野性の想像力に投影された」⁶⁾。

このような体験は、大自然の圧倒的な力の舞台で小さな人間存在について痛烈に覚醒すること、ないし覚醒させられていることである。この原体験から、ウィルソンは生物の多様性 biodiversityこそが生命の進化を支えていることを確信する。

生態系、種、遺伝子の多様性について、「この生命の集合体は十億年もかかって進化してきた。それは嵐をも飲み込み——嵐を遺伝子の中に組み込みそして私たち人間を創造し、この世界を作り上げた。それは世界をしっかりと支えている。

……私にはすべてが時を超越して、永遠に変わる

ことなく続いていくように思われた。だがその強靭さそのものが今、ある問いを投げかけてくる。いったいどれだけの力が加わったとき、この進化のつばは壊れてしまうのだろうか⁷⁾。

生命の歴史である「遺伝子の10億年の進化」と生物多様性の「時の超越性と永遠性」が表現されている。このような体験は、人間自身に刻み込まれた生命の歴史と永遠不変である生物の多様性への畏敬の念に対しての英知的直覚（知的閃き）の発露を確信させるものである。

こうして環境教育の源泉として、生命の永き歴史の連なりを私たちは自覚しておく必要がある。同時に、環境倫理の源泉として、永遠不変の存在であるはずの生物多様性の強靭さも、人間の行動によって「進化のつば」の許容限界に達したことも、私たちは倫理的不安感として直覚しているのである。

(3) 環境教育と環境倫理における情操教育

—道徳的情操の形成—

センス・オブ・ワンダーによる原体験が豊富になると、眠っていた感性の「生得的知恵 inborn wisdom」が覚醒して、情感が形成され、その中で「知的な閃き（英知的直覚 intelligible intuition）」が現われる。

たとえば、知的な閃きの萌芽を示す感性をカーソンは、次のように述べている。彼女は四歳になる甥のロジャーをよく森に連れて行ったが、森にいる動物や植物の生き物についての知識を特別に教えていなかった。それにもかかわず、それらの生き物がどこに棲み、そしてまたそれらが何であるかを、的確にいい当ることができた。

「植物のカラー・スライドを見せると、ロジャーは、『あっ、あれはレイチェルおばちゃんの好きなゴゼンタチバナだよ』とか、『あれはバクシン（ビャクシン）だね。この緑色の実は、リスさんのだからたべちゃいけないんだよ』などといったものです」⁸⁾。

人間は、「生まれながらに備わった驚きの感覚 inborn sense of wonder」をもっている。それが知的な閃きとして働くとき、学習の対象を知識として学ぶことは必要なく、「そばにいる生命の教師」に支えられて学習内容が自発的・自然発生的に知恵として身に刻まれる。人間は、触発されるべき潜在的な感性を生まれながらにもっているのである。

さらに、このような感覚は、美的情感と道徳的情感となり、知的閃きに導かれながら、持続して洗練され「情操 sentiment」となる。つまり、もしそれが自然

の中で子どもの心で満たされ続けるならば、環境教育の源泉である自然の美しさと優しさに対する美的情操となる。他方で、環境倫理の源泉として、自然など人間の力が及ばないものに対する畏敬の念と宗教的な謙虚さが心の中で培われ、道徳的情操となるのである。

2 環境教育と環境倫理に流れる道徳的情操の文脈

(1) 環境教育における道徳的情操

美的・道徳的情操は、やがて社会において人格形成ないし自己実現のための「個性化」の基礎を提供する。さらに人間は、個人の成長のために、人間関係を学び社会生活に適応し「社会化」する必要がある。したがって教育の過程では、個性化とともに社会化も目指される。その場合、社会的情操の教育が大切であることはいうまでもない。このような社会的情操を形成するコモン・センスについて、次に検討し、それと道徳的情操との関連について述べよう。

「コモン・センス common sense」は共通感覚ともいわれ、認識機能として自然や社会に対して外部感覚として働き、他方で自らの身体と心に対して内部感覚として働く⁹⁾。

このようなコモン・センスは、内部感覚として視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚の五感を統合し、それぞれの感覚に共通する機能的感覚として働く。たとえば、味覚の「甘い」という言葉が、「見方が甘い」という視覚、「甘いメロディ」という聴覚、「甘い香り」という嗅覚、「甘い肌触り」という触覚にもそれぞれ共通して使われるのは、この共通感覚が五官を統合しているからであると考えられる。

このコモン・センスはまた、昼と夜を刻むサーカディアン・リズム（概日周期リズム）の生態的な時間に根差しており、したがって個々の生命の生理的バイオリズムを知覚する機能も有する。

さらにコモン・センスは、身体感覚ないし体性感覚として、五官が共通に存在する皮膚を基盤としている。そしてその皮膚は人間の身体の表面において「外の環境」と「内の環境」を区切ると同時に、両者をつなぐ働きをしている。つまり皮膚の上にある身体・体性感覚によるコモン・センスは、外の環境から自然や社会の情報を五官で感じると同時に、内の環境から生理的・精神的な情報も感じとっている。また逆に、情報を受け取るだけでなく、内部感覚はそれぞれの生命個体が外部の自然や社会の環境に適応するように、情報の発信や生存のための主体的活動を行なって内の環境

と外の環境をつないでいる。

人間は自然や社会の環境について、外に向かって水平に自然や社会の出来事を「あるがままに」知ろうとする。他方、自己の生命や心の環境については、内に向かって垂直にみずからの身体と心を「あるがままに」自覚しようとする。コモン・センスによってそのような「外なる環境」と「内なる環境」を、あるがままに認識できれば、健全な環境と健康な生命が、自然的・社会的・精神（心）的環境において融合し、すべてのものに共感して相互にコミュニケーションできるようになる。それは、共感的な道徳的情操が成立し得る場であるといえよう。

こうしてコモン・センスは、社会的情操として人格形成ないし自己実現のための基盤的感性、すなわち社会化のみならず個性化をも支える道徳的情操であると考えられる。

したがって、自然生態系だけでなく、人間が活動する社会生態系。また心の生態系において、外の環境と内の環境をつなぐ身体活動による環境教育が実施され社会的・道徳的情操が育まれるなら、他者や社会の世界に共感的に移入でき、健全な社会生活や公平な倫理観を身につけ、人格形成も豊かなものとなるであろう。

(2) 環境倫理における道徳的情操

—感性の文脈とケア倫理—

① 社会倫理としての道徳的情操

道徳的情操 moral sentiment は、人間の社会・経済活動を分析するため、古くはスミス Adam Smith やヒューム David Hume によって提唱された¹⁰⁾。つまり、社会生活を円滑に過ごすためには、人々の行動や感情は共感 sympathy され社会的に相互に承認を得なければならない、社会的な道徳的情操による是認が不可欠とされた。社会活動において当事者の感情の表出の程度とそれに対する観察者の共感が一致したときは道徳的情操が生じて是認され、共感が生じないときは否認される。このような共感による道徳的情操は、社会的情操として倫理の規範を与えるものとなる。

このようにして、センス・オブ・ワンダー、美的・道徳的情感、コモン・センス、知的閃き（英知的直覚）は、倫理的な価値判断としての機能を有する一連の感性の流れであることが理解できる。それらが社会的な場面において働く場合、社会倫理としての「道徳的情操 moral sentiment」であり、個人の内面性に生じる場合、良心としての「道徳感 moral sense」として発達するのである。

②一貫する道徳的情操の文脈

このような感覚 sense —情感 affection —情操 sentiment —直覚 intuition という感性の洗練と濃密化のプロセスから、環境教育と環境倫理についても共通の文脈（コンテクスト）が把握できよう。環境という共通のタームで融合された両者の感性的源泉を求めてきたゆえんである。

こうした感性の認識・価値判断の特徴は、存在する対象に一点として論理・分析的に焦点をあわせる理性の認識よりも、むしろ環境全体の共有の状況において直ちに判断できる直観をつくり出し、最終的には心に良心としての道徳感を形成するところにある。たとえば、見えざる環境の破壊や汚染のような状況をも物事の背後に流れる文脈からその危機を直観し、このままでは放置できない感情に私たちは突き動かされ行動するのである。

ところでこのような感性の発達の文脈は、五感のバランスを保って道徳的情操として健全に物事を知覚するようにさせる。また教育的文脈では、知的な「真理観」や情操的「価値観」を形成する。そして、教育の最終段階で確固たる意志をもって「行動する」態度を道徳的情操によって保証しているのである。

③ケアの倫理による環境倫理と生命倫理の統合

感性の発達の文脈の中に、教育と倫理の源を一貫して見いだしてきたが、環境倫理をあつかうと必然的に生命倫理にも触れる必要がでてくる。なぜなら、環境と生命には表裏一体したものであるからである。そして、もし環境教育と環境倫理の道徳的情操の同じ文脈から「ケア care の倫理」を設定してみると、両者を統合できる可能性があると思われる¹¹⁾。

環境保全も生命の健康も、人々が思いやりや相互理解の道徳的情操をもって共感的にケア care することが大切である。マクロ的・無機的に見れば、自然環境の破壊が現状のままに進行して、現在の生物種や人間が生きられなくなっても、地球や自然はそのまま持続するであろう。しかしミクロ的・有機的に見れば、持続可能な環境がすべての生命の存在にとって必要となるであろう。そのために道徳的情操の文脈の上に環境と生命を統合するケアの倫理による環境教育が不可欠であると考えられる。

環境と生命の多様性は、ウィルソンが述べていたように、基本的に生態系、群（共同体）、種、生命、個体、そしてDNAがそれぞれ同一性を保つ必要がある。そして、感性の覚醒の大切さを強調してきたように、もの言わぬ動植物や自然物の声を聞くことや終末期の患

者の声を聞くことができる情操教育が重要である。すなわち環境と生命をケアする場合、一貫する道徳的情操の文脈において、言語的コミュニケーションをこえた、非言語的コミュニケーション（コミュニオン、感応）が必要である。したがって、自然が生み出した芸術作品（環境）や結晶（生命）に対して、美的・道徳的情操によるケアの倫理によって、環境倫理と生命倫理はケアの倫理で統合できる可能性を有すると考えられる。そのケアの倫理が「持続可能な環境と生命」の倫理的枠組みを理論的に提供できよう。

3 環境倫理にもとづいた環境教育論

（1）教育と倫理の源から価値の世界へ—精神的覚醒—

自然体験において、感動する感覚、美的情操や道徳的情操にはそれぞれのレベルで知的閃き（英知的直覚）が働くことは既に述べた。それが内的・個人的に機能するときには、教育の源として精神の覚醒となる。

教育は、社会化の側面において、知識や文化の伝達、社会的適応の支援、そして個性化の側面において、心身の発達の援助、自己実現のための精神的覚醒が融合して統一されることが大切である。つまり、知識や文化の伝達においては、人間が作り上げてきた知的遺産や伝統文化を学び維持するとともに創造して次世代へと伝達すること、そして豊かなコミュニケーションのある対人関係と激動する社会の変化に適応できる能力を養成することである。心身の発達の援助においては、生物学的に制約されながらも、基本的安定感を形成する情操の育成と生きる力の教育である。そして心の精神的覚醒に関して、個人としては良心の熟成による自己実現の教育であり、人間としては社会化を通じた人格の完成のための支援である。

エドゥアルト・シュプラランガーはとくに精神的覚醒の重要性を主張し、価値の世界へ導入することが教育において必要なことを、次のように述べる。

「子どもを自己自身の内に導き入れるささやかな諸体験が、学校生活のなかで、たえず子どものために起こるべきである。それらの諸体験のうちでもっとも奥深いものを、われわれは『底から揺り起こすような aufwühlend』というのである。そうした体験が心に刻みつけられるべきであり、もっとも恵まれた場合には、それは『持続的』でもある。すなわち、その体験は決して二度と完全には忘れられない」¹²⁾。

このようにシュプラランガーは、自然における「環境意識」の原体験と同様に、「底から揺り起こす」よう

な心の精神的覚醒という原体験を述べている。私たちが会おうものの価値内容や人生の意味などを感じとり、より高い価値へのひそかな憧れを刺激し、人間本性のうちに真に「神的なるもの」をつくり上げることが教育の本質である、と考えている。

(2) 環境倫理にもとづいた環境教育

—価値体験と価値観教育—

①精神的覚醒による価値体験

カーソンやレオポルドの環境と生命をめぐる体験では、自己の人生観や世界観を「底から揺り起こす」体験であり、それぞれの人たちはそれを「心に刻み」つけられて、一生「持続」する価値尺度となった。さらに「神的なるもの」は、ウィルソンにおいては大自然や生態系の渾然一体となった大ハーモニーや生物多様性における生命の輝きであった。私たちは環境教育と環境倫理の源泉をここに見い出してきた。

他方、人間の教育においても、シュプランガーが主張するように、情操による価値を見出す精神的覚醒が不可欠である。それによって「人生の意味」に気づき、「生きる力」をみずからつくり出す教育がおのずと展開することが理解できる。

ここでは、人間本性の原体験が精神的覚醒を通じた価値体験と重なり、小さな自我意識をこえた大自然や神的なるものにまで価値が高まり、かつ深まっていることに注目しておきたい。

②価値観教育としての環境教育

自然への愛情・尊重・感嘆の念そして生命の尊重・共感・ケアなどの価値は、より高い倫理的価値へと普遍化していく。その意味で、環境倫理も環境教育も、多様な価値を認める人間を形成することであり、その限り「多様な価値観教育」が環境教育の原点であるということになる。つまり、DNAや生命個体、種、共同体さらには生態系の多様性のそれぞれに、固有の価値を認め、ケアする教育が必要であろう。

さらに種々のレベルで価値が衝突して対立や矛盾が生じた場合、みずからどの価値を選択すべきかを培うメタレベルの価値（諸価値を統合する高次の価値）の教育も大切となる。たとえば、「『問題』が適切であるかどうかを問題とする」価値基準や、「『感動』する他者の心に感動する」価値体験が、統合的な高次の価値原理となるのである。

したがって環境教育で見い出された並列的な諸価値は、環境倫理によって高次の規範的枠組みとして統合される。それゆえ高次の統合的な規範的枠組みを示す

環境倫理にもとづいた、具体的な諸価値を発見する環境教育が、その枠組みの中で展開されることが要請されるのである。

③「環境倫理にもとづいた環境教育」の役割

こうして環境と生命の存在に対して、愛情・尊重・感嘆をもって多様な価値に自律的に目覚める教育が大切であることがわかる。つまり人格の構成要素である「知」、「情」、「意」の底に流れる「信」の教育こそ、「環境倫理にもとづいた環境教育」の役割であるといえよう。その意味で、環境教育は具体的な多様な価値に目覚め、そこから環境倫理の枠組みによって自己決定できることをサポートする教育であり、したがってそれは価値観教育であるといえよう。

それはさらに、自然、動物、植物などの“自然生態系”のみならず、“社会の生態系”や“心の生態系”を学びながら成長する価値観教育でもある。そのような教育を経た心豊かな若者は、より充実した人生を過ごすために「知」「情」「意」が統合された人格を目指すであろう。そして環境破壊や環境汚染をみると確信のある「信念」をもった態度で、価値あるすべてのものをケア（保護的配慮）し、自主的に責任ある倫理的行動をとることであろう¹³⁾。

4 まとめ

教育と倫理の源をたずねて、環境教育と環境倫理の原点を明らかにした。そこには一貫して流れる感性の文脈が存在した。それはセンス（感覚）であり、情感であり、情操であった。濃淡は別として、どのレベルにおいてもその都度に働く英知的直覚（知的閃き）は飛躍の発条であり、感性と情操の純化と人格の陶冶こそ人間の成長と環境問題の解決への道標となろう。

こうして、環境教育の方向性を示し、環境教育の活動がその中で具体化できる規範的枠組みとしての環境倫理が必要であることが理解できた。「持続可能な環境と生命」のために、「環境教育の役割」は一つ一つのケースを体験的に実践して具体的価値の覚醒を促すことであり、「環境倫理の役割」は多様な諸価値をメタレベルの（並列的諸価値を選びとる）次元で統合し、共通の目標と規範的枠組みを提供することである。

〈注・文献〉

- 1) John Dewey, *The School and Society and the Child and the Curriculum*, The University of Chicago Press, 1990.

- p.25 (邦訳 デューイ『学校と社会』, 岩波文庫, 1983年, p. 36)
- 2) Rachel Carson, *The Sense of Wonder*, Harper & Row Publishers, 1965. p.54 (邦訳 レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』, 新潮社, 2001年, p. 23)
 - 3) Ibid., p.55 (邦訳pp. 23-24)
 - 4) Aldo Leopold, *A Sand County Almanac*, 1987, p. 120 (邦訳 アルド・レオポルド『野生のうたが聞こえる』, 講談社学術文庫, 1997年, p.192)
 - 5) Ibid., p.149 (邦訳 p.234)
 - 6) Edward O. Willson, *The Diversity of Life*, Norton and Company, 1999, pp. 6-7 (邦訳 エドワード・ウィルソン『生命の多様性 (上)』, 岩波現代文庫, 2004年, p.11)
 - 7) Ibid., p.15 (邦訳 pp.24-25)
 - 8) *The Sense of Wonder*, p.23 (邦訳 p.12)
 - 9) 中村雄二郎「第Ⅱ章 視覚の神話をこえて」『共通感覚論—知の組みかえのために—』岩波現代選書, 1979年, 参照。
 - 10) ここでは, アダム・スミスの『道徳情操論』(原著: Adam Smith *The Theory of Moral Sentiments*, Clarendon Press, 1999) の「共感論」を想定している。
 - 11) 高橋隆雄「生命と環境の倫理」(高橋隆雄編『生命と環境の共鳴』九州大学出版会所収, 2004年), 参照。
 - 12) エドゥアルド・シュブランガー『教育的展望—現代の教育問題—』, 東信堂, 1993年, p. 106
 - 13) 倫理は一つの抽象的原理からすべてを説明できるわけではなく, 徳性という価値も問題となる。人間は, 徳性を身につける努力から「生きる意味」を学ぶ。本能的に生きるだけでなく, よりよく生きることが大切である。ソクラテスの生き方が教育の理想像とよく言われるゆえんである。倫理が示すメタレベルの価値観教育は, 教えることはできず, 人生の環境体験を通じて「生きる意味」についてみずから覚醒し, みずから獲得するものである。